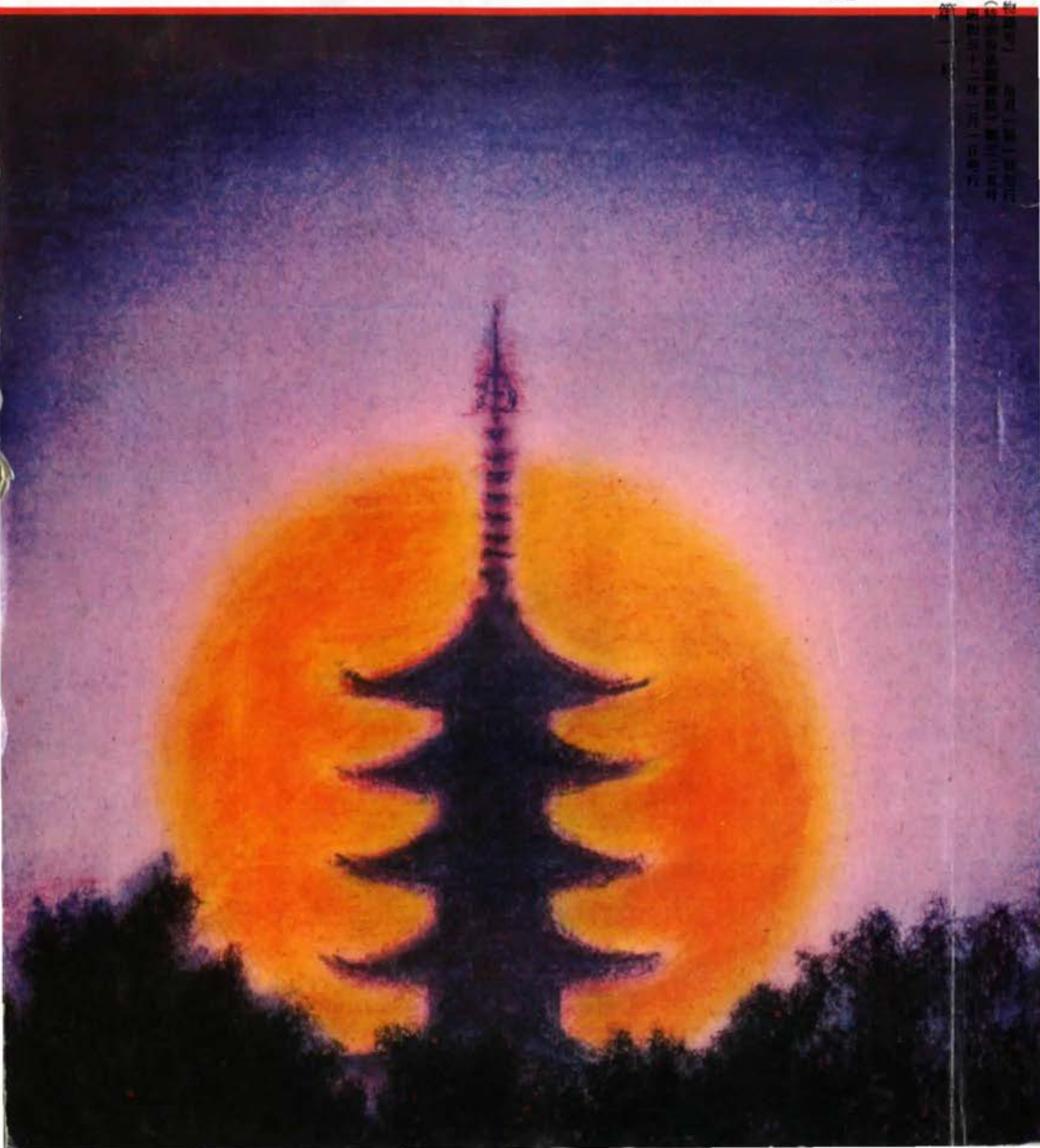


浄土

1977 - 1

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(航空郵便物認可)第三五号
昭和五十一年十二月二十五日印刷
第四十三卷





波
浪
遙
連
天
一
涯
渺
茫
大
海
映
朝
曦
弥
陀
本
願
亦
相
似
清
濁
俱
吞
无
盡
期

昭和丁巳年御題海護賦

華頂山式神遊全宏



海に寄せて

浄土門主

岸 信 宏

波
浪
遙
連
天
一
涯
渺
茫
大
海
映
朝
曦
弥
陀
本
願
亦
相
似
清
濁
俱
吞
无
盡
期

昭和丁巳年御題海護賦



正月号

目次

△年頭所感▽

御題「海」に因みて……………	岸 信宏……………(2)
昭和五十二年を迎う……………	大野 法道……………(6)
生命の殿堂に明かりを灯せよ……………	林 靈法……………(7)
懺悔と誓願……………	高 畠 寛我……………(9)
おいぼれの老婆心……………	宮 本文哲……………(10)
念仏と長寿……………	石 井 真峯……………(11)
初春を寿ぐ……………	一 条 智光……………(13)
念仏の心——法然上人八十歳のお正月……………	岩 井 信道……………(14)
初詣での雑踏の中で……………	福 田 亮成……………(18)
巳歳を占う……………	今 枝 二郎……………(22)
浄土教の流れ八十三〽目をあげて女人を見ず……………	竹 中 信常……………(26)
法数術語補遺(一)……………	宝 田 正道……………(31)
念仏ひじり三国志(三十三) 法然をめぐる人々……………	寺 内 大吉……………(35)

表紙 久住 静雄画

カット 大正大学美術部



御題「海」に因みて

浄土門主 岸きし 信しん 宏こう

○
昭和五十二年の新春を迎えまして大慶の至りに存じます。昨五十一年は私に取りまして思い出の深い年でありました。私は明治二十二年三月二十八日の生れでありますから、昔風に数えて八十八歳の米寿にあたりましたので、浄土宗務庁と知恩院事務所の主催で盛大な祝賀式が知恩院に於て行われました。

祝賀会は三月二十六日に行われました。春の彼岸の終りました直後で、まだ肌寒さを覚ゆる初春の季節でありました。宗務庁からは本庁の役職員、一宗諸機関の代表者、地方教区の代表者等、知恩院からは寺務所の役職員、諸講者の人々、私の法類関係や、内侍関係の人々、親戚の代表者等が集って頂き、盛大に行われました。大殿で式典が行われ、和順会館と華麓苑とで賀宴が催されました。約一千人近い人達が集まって下さいました。私

の晩年の感激であります。

私の誕生日の三月二十八日の夕方からは慈善会の主催で内祝が市内の伊勢長という料亭で催されました。慈善会という会名は私の阿号が慈阿と申しますので、「慈阿の香」という意味の会名になっているのです。今までは別に会の規約もなかったのですが、本日の集りを総会として、会則を協議して決定いたしました。会員は私が六十歳で知恩院へ晋山しました昭和二十三年から五十一年三月の米寿まで二十八年間、内侍につとめて頂いた人達が主体となり、法類の代表者、親戚の代表者を加えて五十有余名になります。平常起居を同じくした人達が大半を占めていますのでその懐かしさも一しお深いものがありました。

○

更に私は実家愛知県中島郡平和町法立（ほうりゅう）の岸英三氏の宅で親戚の人々からの祝賀を受けることになりました。英三氏は私の末の弟の宗平氏の長男で、名古屋の松坂屋本店につとめ、すでに三人の男子の父親であります。私は五十一年の六月六日に行われた飛騨の高山

市の大雄寺の本堂復興の落成慶讃法要の帰途、微行の形式で、随行の石橋義宏内侍課長と二人にて、この愛知県の実家に立ちよりました。この辺も純農村でしたが今は名古屋市のベッドタウン化しつつあります。祝賀会は六月九日に行われました。朝早くから町の人達が来て下され、十時半頃名古屋から渡辺家の人達が夫婦そろって、八組ほど来て下さいました。同家は松坂屋本店の別家衆の内の一家で、私の父の弟に当る人が松坂屋に勤務中、渡辺家に迎えられ、男二人、女五人ほどの子宝に恵まれました。長男信一氏は名古屋大学経済学部教授を定年にて退官、現在は講師として講義を続けれられるのとこのことです。二男英三氏は松坂屋に勤務、累進して副社長を二期つとめられ、今は参事の地位にあると聞いています。女性の方々も相当なる家柄に縁付かれた幸福なる一族と言えましょう。そういう方達が私の一身の上に何か事あるごとに集って下さることは、まことにありがたいことであります。田舎では慶弔ともに餅をつくことが習わしであります。慶びの場合は特に餅をついて喜ぶのであります。今日の行事もこの餅つきが中心となっております。

十一時頃より御仏壇の前で御回顧のあと、このたび私の米寿のためにこの催しをして頂いたことにあつく御礼を申しのべました。餅つきが始まりました。白い餅、よもぎ入りの草餅がつきあがりますごとに、それをあんころにし、又大根おろしにしてたべたり、一同皆大はしやぎでこの野趣の味を喜ぶのでした。

私は学生時代、東京への行き返りに実家へよりますと、母がいつもこの草餅を作って下さったのであります。亡き母のことを思うといつもこの草餅のことが思い出されて、

ふるさとかへりみすれば草餅を

作りたまへる母にてありし

という拙い歌をよんだのであります。この歌の碑が十年程に私の実家の庭に建てられました。

○

右のように私の米寿の祝賀は、第一には三月二十六日に京都の知恩院に於て、宗務庁と知恩院との主催のもと

に行われ、第二には内侍関係の慈善会の主催のもとに三月二十八日の誕生日に、京都市内の料亭伊勢長にて行われ、第三には六月九日に私の実家である愛知県の平和町で行われ、第四回は私の師籍でもあり、住職地でもあった和歌山県田辺市の浄恩寺で行われたのであります。私は十一歳の年から六十歳まで約五十年間、藤田善信師に就て教養を受けて、その師籍を相続し、昭和二十三年十月に浄土宗本派時代に知恩院の第八十三代に推挙を受けたのであります。いわば田辺市は私の第二の古郷でありますので、親しい人々もまだ大ぶんに御生存していられます。祝賀会には一百名程出席して下さいました。檀頭の脇村家の当主義太郎氏は東京大学の経済学部の名誉教授で逗子市に別宅を持っていられて本日は御用があつて出席せられませんでした。平常脇村家本宅の差配は近所に住んでいられる令弟の孝三郎氏がつとめていられ、又令妹の山本ちゑ様という此度の大戦争で未亡人となられた方がお留守番をしていられます。孝三郎氏は祝賀乾杯の音頭を取って頂き、ちゑ様はお茶の友達をいつものように同道して出席をして頂きました。

そして右のちゑ様らのお茶の友達の一人に奥熊野湯の

峰温泉のあづまや旅館の玉置梅子様という方がいられます。昔からの湯の元を持って、旅館をいとなみ、熊野三山の内の本宮大社の湯垢離(ゆごり)の温泉であります。

梅子様の御主人辨吉氏は外移のお医者様で、田辺で医院を開業していられたのですが、五年程前に逝去せられました。医院の方は御子息が継承せられ、梅子様は湯の峰へ帰られ温泉の経営に当っていられるのです。先年田辺脇村家から串本の矢倉家へ縁付かれています貞子様の御長男に、湯の峰の玉置様の御長男の娘様が縁付されましたので、この脇村、矢倉、玉置の三家は御親戚の間柄となつたわけであります。ところで、この三家の家々は、山林業家としては和歌山県下でもことに有数の家柄であります。

○

このように、右様の関係にある湯の峰の玉置梅子様か

年 頭

所 感

ら、先年来度々自家の温泉に入湯を進められますので、米寿の祝賀を四カ所できて頂いた記念と保養とのためにと思ひまして、湯の峰の温泉へ参ることにいたしました。そうして、次いでに熊野三山を巡拝して幼時より今日までいろいろと因縁の深い熊野の天と地と人に対して御礼を申し上げたいと思つたのであります。

熊野は日本列島の中、本州の最南端に位し、海岸の勝景は吉野熊野国立公園の一部として、太平洋の眺めは果てしなく広く、五十二年新春御歌会の御題は「海」と仰せ出されていますので、御題のこころを思い浮かべながらの旅でもありました。そして、左に掲げましたような歌を詠んだわけでした。

本州の南端に立つ展望台

潮の岬の浦はてしなし



昭和五十二年を迎う

大本山増上寺法主

おおの
大野 ほうどう
法 道

あります。

ここに昭和五十二年の新春を迎えることとなりました。世を挙げて迎春のよろこびに満たされております。昨年は今上陛下の御在位五十年の記念祝賀式典がありましたが、世の中は年々ごとに進展し、文化は進歩し生活は向上してまいりました。本年も相変らず進歩向上して行くであろうことを希うものであります。新しい年を迎えて、身も心も新たに、時代の進歩とともに私たち自身もより発展していかなくてはならないと切に希うもので

あります。しかし浄土教の信ずる仏の世界、すなわち浄土、私たちの理想とする世界は、「一立古今然」と言われるように、何の変化もなく、仏の本願力によって建立せられて、無上究竟の極楽の世界であります。この世の状況はこれに反して、つねに進歩向上を遂げるべきものでありますから、その心がけで努力すべきであります。一言もって新春を迎える辞といたします。



生命の殿堂に明かりを点せよ

大本山百万遍知恩寺法主

はやし
林 霊 法
れい ほう

最近、書店に「日本人は死んだ」とか、「日本を買いませんか」とか、これに類するような書名の本がいろいろと並んでいる。しかも、これらの書物を書いている内外人の見識には、必ずしも思いつきのものではなくて、現在の日本人の意識なり生活の構造について、きびしい切りこみが見られるのである。

更に、この日本人についての解剖が、精神分析や精神病理や文学法律の立場の専門家によってすすめられて、いま日本人論についての論議がやかましく論ぜられていゝる。これらの論者の立場は、それぞれ専門の立場からのもので、最後は日本人の性格について結論を出しているが、その解明のいと口として、いずれも日本人の日常の会話から論理をすすめているのは興味深い。日本は人種

代名詞の一人称と二人称、即ち私とか君とかについての使用がきわめてルーズである。例えば、私という一人称については、私、僕、わし、おれ等十余の呼称があり、二人称についても同様に、君、あなた、おのれ等十余にのぼる。ところが、外国語の場合は、英、独、仏の場合はアイ、イヒ、ジュの夫々一語であり、二人称の場合は英語はユーの一語であり、仏は夫々二語づつある。しかも、日本語の会話の場合には、一人称も二人称も殆んど省されているが、外国語の場合には絶対に略されぬ。日本語の省略は、文章の場合とてよくあることで「源氏物語」など、主語はなく、これを英訳することは、外人にとって大変なことだらう。

以上のことは日本人の意識や生活の構造の性格をよく

示している。日本語の場合の一人称、二人称がそれぞれ何種類もあり更に省略されていることは、日本人の人間

人格の自主独立という意識のうすいことを示している。

例えば、二人称の私は、先生や上司に対しては私だが、友人に対しては僕であり、妻君に対してはおれとかわしとなっている。即ち、その場の事情によって、私というものの性格が変化していくのである。だから、そこには、いかなる事情にも影響されない自己という個人の自主性が見出せない。その場の状況事情が個人に先行する。これに対して、例えば英語のアイは国王に対しても自分より下の者に対しても不変の自己を確立している。そこで、日本の場合に、自己というものは、自分をとリまく状況の中に埋没することにより、自己の意識や生活構造の中に人情とか義理と言った日本人独自の精神構造を生じてくる。そして、この義理に反して行動をとった場合に、そこに申し訳ない、恥しいということになってくるのである。

ところが、西洋においては、私という人間個人の独立自主性は、何と言っても日本人の如く、その場その場の義理人情によりかくされていくのではなく、あくまで一

匹狼の立場を取りうることとなる。義理や人情によって自分の人格が左右されることは少ないだろう。

この日本人と西洋人との比較なりの事実を、最近のロッキードのアメリカのコーチャン氏らの証言と日本の国会の証人台に立った連中との比較の中に見ることが出来るだろう。ここでこのことと関連して思い出すのはルー・ス・ベネディクトが「菊と刀」で論じている日本人と西洋人の生きる姿勢の相違である。西洋人は神とわれとの垂直の姿勢で生きて来た。神とわれとのきびしい姿勢である。横に誰が見ていようと見てまいと、そんなことは問題でない。そこに「罪の文化」の形成があった。しかし、日本人はすべて自分の生活を動かすものを神とわれという垂直の線においてではなくて、横の人間関係において見出していくのである。家族や政党や職場や、その他自分の帰属する集団の中の規範によりて動いていく。ここに自ら義理とか人情によりて動いていくことが多い。自分が集団に反して行動をなしたとき、一度はきびしく批判されるが、やがてそこに「甘え」の場が生まれてくるのである。日本人の「恥の文化」はこうした土壌から生まれてくる。

日本人のこのひとり歩き出来ぬわけはどこから来ているのだろうか。それにはヨーロッパでの長い歴史を通して民主主義の思想内容である人間の尊厳がどこから生まれて来ているかを見ればわかることである。キリストの世界観から近代化へと歴史の長い歩みを通して生まれてきたものだ。いまの日本には本来に人間の尊厳を基礎づける思想もなく、努力も払われていない。人間の尊厳の根拠は仏教的世界観から始めて全うせられることである。



懺悔と誓願

一億日本人の一人ひとりのからだは立派になったが、そのからだに肝心のご本尊がない。からっぽである。一億日本人の一人ひとりの生命殿堂の中に仏という晃々たる明りを点じていくことである。

「利剣名号」百万人運動、私は二年前から各地を歩きながら、「利剣名号」を配布しながら、日本人の一人ひとりに火つけの役をさせていただいている。本年も力いっぱいこの仕事をつづけていくのである。

大本山清浄華院法主

高 たか
畠 はた
寛 かん
我 が

新しき年を迎えてまことに大慶に存じます。旧臘蔵書を調べて居る際に手に触れましたのが、『普賢行願賛』の梵本の写本でありました。この写本は上中下の三巻本で、『普賢行願讚』梵本聞書とあり、明和九年正月二十二日より御授と記され、筆者も教授者も名前を書いてあ

りません。しかし内容は悉曇文字の原文と訳文が漢字で書いてあります。今は「入法界品」の梵文が出版されて居ますのでそれと対照することが出来ますが、それはともかく、私は「行願品」の十願のうち、第四の業障懺悔と第五の功能随喜の所を調べたく、そこを読みました。

吾々の平生読んで居る「略懺悔」文では、終りの句は「一切我今皆懺悔」でありますが、懺悔に当る原文字は「prāṭisāyā」で、詳述する、陳読するの意であります。そこでこの書は註釈して「自己の罪過を他に対して読与す、懺悔の義なり」と、即ち一切の罪過を悉く皆懺悔するという意味であります。次に第五の願は声聞緣覺菩薩諸仏如何、十方群生の福を随喜する意味であります。今、これとは別に授戒会の「十二門戒儀」の行事を見



おいぼれの老婆心

るに、第四懺悔、第五発心とあります。それで第四懺悔では、前述の「略懺悔」の文を読み、第五発心では「四弘誓願」の文を読みます。これ「普賢行願」の第四願と第五願に対応するのであります。吾々は平生勤行の時には「略懺悔」を読み、お念仏を唱へ、「四弘誓願」の文を読みます。普賢の行願、授戒の行儀、平生の勤行を通じて、懺悔と四弘誓願とは離すことの出来ない関係にあることを痛感して年初の心を新たにしたいと存じます。

大本山善導寺法主 みやもと ぶんてつ
宮 本 文 哲

大本山善導寺の境内に、当山の御開山であり、浄土宗の第二祖と崇められた、鎮西上人・大紹正宗国師御手植の大楠がある。側に立った標札には、「福岡県指定天然記念物、大楠、地際周囲、三四・六メートル、樹高、四一・〇メートル、樹令、八百年」と書いてある。老僧は

朝の勤行の時、三祖堂の渡り廊下から、此の大樹を眺めて一種の神々しさを感じず。又参詣の人々も、これは善導寺のシンボルであり、神木であるとあがめておる。昭和五十一年九月十三日、台風十七号は福岡県を直撃した、其時は流石の神木も散々やられた、大小無数の枝

は地上に散乱して、足の踏み場もない程であった。だが根幹はビクとしなかった。私は土中深く、広く、強く張りめぐらしている根の強さに驚いた。

老僧はこの現状を眺めて、フトこんな事を想ったのである。現下の日本の国状は、恰も台風の直撃を受けた時の如く、テンヤワンヤの状態である。政治に、教育に、財政に、外交に、其他万事に安定を欠いておる。このまま進めば、「吾が祖国よどこに行く」と憂慮せざるを得



念仏と長寿

ないのである。なんとかして此の危機を脱する道はなきものか、かの大楠の根幹の如き大人物はなきものかと、古今東西にその先覚者を求めた時、老僧の口より言うは、いささか我田引水の響はするが、大聖釈尊の教、即ち仏教を真剣に再認識せよ、と叫ぶのである。光は必ずそこより来ると確信するのである。

終りに臨み、年頭の祝賀を申し上げ、尚益々のご交誼を祈念する。合掌

大本山光明寺法主

石井真峯

長らく侍従次長や掌典長、明治神宮宮司などをつとめられた甘露寺受長さんが次のようなことを言われている。

「心を静める時に、私はいつも南無阿弥陀仏というこ

とにしている。……別に仏教信者の私ではないが、仏さ
まは信仰しているから、その言葉だけ拝借して南無阿弥陀仏を唱えるわけである。この言葉を口にすると不思議と心が静まる。道端の角に行っても南無阿弥陀仏、すると心が落着いて、自動車の危険がなくなる。……仏さまでもよい、神さまでもよい、その前に行って拝むという

ことは良いことだと思う。いや良い悪いの問題以前に、ともかくにも実行してみることだ。繰り返しているうちには、いつかきつと心が平らかに静かになって来る。ものに感謝してこれを拜む心、南無阿弥陀仏を唱える心は、いつも忘れず、いつまでも保っていたものです。

(昭和四十八年二月号『大法輪』)

甘露寺さんは、九十何歳かで今もお元氣のこととと思う。仏教信者ではないと言っておられますが、念仏を唱えている間にいつか立派な念仏行者になられ長寿を保ったのではないでしょう。

○ ○ ○

私は医学のことは何もわからないが、医者の説明によると吸う息が不足すると血液中の酸素が不足し、吐く息が浅ければ不要のガスの排除が十分でない。そこで欠伸をしたり、溜息をついたりするが、これは自然に、浅い呼吸の害を防ぐのである。

腹に力を入れ、力強く念仏すると、横隔膜と腹の周囲の筋群との協同収縮による強い腹圧が出来、血液を心臓へ送り返すのに大きな力となる。悲しみ、嘆き、おどろ

き、怒りなどは呼吸や心臓のリズムを乱す曲物であって健康を害するが、これは精神活動で整えられる。口称念仏こそ偉大な調整力であるが、腹から出る念仏でなければならぬ。今も結核患者は多いが呼吸の浅い人がかかりやすい。浅い呼吸を続けると肺は次第に弱まる。肺のガス交換が低下するからである。

脳血管の人は大半血圧が高い。怒り、あせりが原因となる。またリキム動作の時起りやすい。血圧の急上昇を起すからである。胸に力が入った時起る。腹に力を入れねばならぬ時一緒に胸に力を入れてしまう。いかに腹圧をかけても胸に力の入らない方法がある。必ず息をはきながら腹に力を入れる、つまり口称念仏することで、そうすれば胸はいつもすがすがしい。排便の時、入浴の時、人と応対する時念仏を唱えることである。

以上は医学博士村木弥一郎先生が書かれたことを読んで、私が覚え書きしたものをもとにしてまとめたものである。

各宗の高僧のなかでも念仏宗のかたが長寿であったように思われる。昔の高僧では親鸞聖人が九十歳で遷化され、法然上人が八十歳、近年では山下現有大僧正が百三

歳、堀尾貫務大僧正が九十五歳、椎尾弁匡大僧正が九十

四歳であった。



初春を寿ぐ

大本山善光寺大本願法主

いち じょう ち こう
一条 智 光

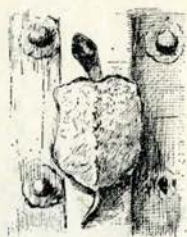
昭和五十二年の佳辰を迎えました。新春、あけましておめでとうございます。本年もまたお念仏の同信のみなさまの幸多きことを、心からお祈り申し上げます。

新しい日の出とともに新しい年がやってきましたが、「南無阿弥陀仏」と申す私たちの心に変りがあったてはなりません。しかし年の終りと年の始めは、人生におけるひとつのけじめでございます。初春の慶びごとは、お互いの慶びごととして認め、この何もかもが新しい慶事

を、同信のお念仏の声とともにより一層実のあるものとして行きたいと思ひます。

日々の精進のひとつひとつは、すべて私たちの心掛け次第で、どうとも変つてしまいます。新しい明かるい年がやって来たわけですから、お互いに心身をひきしめて、お念仏の称名称揚に努力すべきであります。新しい年に向つて、みなさまともども、私も念仏の精進を誓いたいと思ひます。

年 頭 所 感



念仏の心

—法然上人八十歳のお正月

いわ
い
しん
どう
岩井信道

(総本山知恩院布教師会長
京都・伏見阿弥陀寺住職)

元日の朝のお祝いがすむと、ここ数年何時も一人で家

を出る。法然上人の御廟へおまいりをする為である。初詣でで賑う八坂神社の前から丸山公園を通り知恩院に入る。通いなれた道ながら山の縁、街々の家並にも新しい年の息吹が感じられる様である。八坂神社程ではないが、知恩院の御影堂にぬかずく人々の数も年々多くなつて来たのに驚く。

御影堂の東側より御廟道まで来るとさすがに人影もない。約百段程のなだらかな石段をのぼりつめた左側に勢至堂がありその上に法然上人の御廟がある。深閑として一月の朝の冷気が身にしみ入る様である。磨きあげられた拝殿の床に登り「一枚起請文」を誦して、お念仏を称

えるのである。

毎年元日の朝に元祖様の御廟でお念仏申すことの出来る幸せは京都に住めばこそであらう。



建暦元年十一月二十日、法然上人は流罪の地勝尾寺より御帰洛、四十三歳より七十四歳迄三十九年間の常住の地である東山吉水の禪房より程近き、栗田の青蓮院の入院、南禅院(現在の勢至堂)に入られる。越えて建暦二年一月二日より病床に臥され、二十三日には御遺訓として「一枚起請文」を残され、翌々二十五日正午の刻に念仏の声と共に浄土に還られたのである。今から七百六十六

年前の事である。

人間としては最も大切であるべき晩年の五カ年間を、無実の罪の配所に過されて、ようやく帰ることを許された上人が、久しぶりに都の新年の朝をどの様におむかえになったであらう。



御流罪で都を出発される時に、お弟子法蓮房信空に、「私は永い間都の人達と共に念仏を申して来たが、まだ辺鄙は田舎の人達にはすすめたことがない。今度の事で四国へ行ったならば、また向うの人達と共に念仏を申します。これはむしろ有難いことです」とおさとしになった。しかしこのおだやかな言葉の蔭には、当時の念仏門への弾圧に対する、烈々たるお氣持がひそんでいたのではなからうか。



岡山県下津井港よりフェリーボートで、美しい瀬戸内海の島々をながめながら、約三十分で、本島の泊港に着く。この島はかつて塩飽海賊の頭領であった、高階の保

遠の入道西忍の館あとがある。今は京大阪より三時間程で着くが、法然上人の頃にはどの様であったらうか。

三月十六日花洛の都を出でて鳥羽の津より川舟にて、桂川、淀川を経て大阪天満で海舟に乗替、尼崎、高砂、室津と港口の諸人を教化されつつの旅である。同じ月の二十六日、讃岐へ上陸される前に、この島へ渡られたのである。

風光明眉なこの島も、今は過疎の沈にあらわれて、約六百戸程がひっそりと暮している。古びた陣屋の建物や数ヶ寺の寺が点在する。

徳川時代よりこの島は大名の支配下には屈さず、いわゆる人名といつて独特の自治政治を行なっていたらしい。幕末の頃、勝海舟が威臨丸ではじめて太平洋を横断した時の水夫達はほとんど勇敢な塩飽諸島の人達であったという。

島の中央の小高い丘の頂上に小さな台地がある。そこからは備讃瀬戸を航行するすべての船を見渡すことが出来る。地頭、河権の守高階入道西忍の砦あとである。谷一つへだてて、入道が法然上人の為に建てた庵室あとが今は専勝寺という寺になっている。

後世になって讃岐の各地に散在していた法然上人に関するものはほぼ高松の仏生山法然寺に集められたということであるが、それでもこの専勝寺に数点のものが残されている。

上人御流罪の折の御名、流人藤井の元彦の送り状、おそらく馬の先にも立てたものだろうか。駒形の木の札があり。また上人がここで自らお造りになったと言う木鉦（木で造った鉦鉦）がある。上には大きく「忍」の字が浮彫にされ横の方に源空の御名が見える。また、浜の石に爪で名号をお書きになった「爪書の名号石」がある。この木鉦の忍の字には念仏門に加えられた為政者の間違った弾圧に対する上人の「しのべしのべ」というお心があらわれているのではなからうか。

更に上人は、四国の本土へ渡られ、途中善通寺等に御参拝になり、小松の生福寺へとつかれる。今の浄土宗西念寺である。琴平より高松に向う街道より少し入った、

間^{はざま}という部落にある。

うしろには松山と言う綺麗な小高い山を背おい、前面には川の流れをへだてて、金比羅の象頭山を望む。形は小さいながら、東山を後に、前面に鴨の流れとはるかに西山を望む、京都の地形とよく似た所にある。この西念寺に止宿されたのである。更にこれより北の方へ下って行くと多度津に程近い所に、南鴨北鴨と言う小部落があり、それぞれ京都の賀茂神社を氏神としてまつている。平家の落人達が都を想いながら暮した所であるらしい。法然上人もまた京都の吉水の禅房にそのままの様なこの西念寺に住まわれたということは、矢張り永年住みなれた都を、また弟子達を、信者の方々を忘れることが出来ずに、望郷の思いですごされたのではなからうか。この寺から少し松山へ登った所に、小さな水たまりの様な井戸がある。当時、土地の人達がお豆腐を造ると、この井戸に入れておいてあげたという。法然上人は大変に喜んでお召しあがりになった。それ以来、この井戸を豆腐の井戸という。

同年十二月八日、「洛外なれば帰りても宜しい」という宣示により、摂津の国勝尾寺の二階堂にお移りになって、ここで約四年間をお過ごされるのである。讃岐に住の折にはまだまだお元気であったのだろう。松山の観桜会や、時には善通寺等もおまいりされ人々に念仏もすすめられたが、勝尾寺にお移りになってからは、人里も遠く離れて、たずね来る人も少なく、お年もすでに八十歳近くになられて、この頃の上人は全くの念仏三昧の生活であり、

しばの戸にあけくれかかる白雲を

何時紫の雲にみなさん

いうようなこのお歌の通り、ここを最後の地と定められて念仏一途のご日常であった。

それが建暦元年十一月十七日に帰洛をゆるさるご沙汰があり、早くも二十日には宿所さえもなかった都入をされたのである。

矢張り、あきらめていた、都であってもゆるされてみると一日も早く帰りたい、弟子達にも信者の人達にも逢いたいという老の一徹の心が元祖様のお心をこの様に急がせたのではなからうか。

矢張り聖人と言われた法然上人にも京と同じ人間のお持ちであったと思われる。

◇ ◇ ◇

そして弟子達との久し振りの楽しい団欒も東の間明けて建暦二年の正月をお祝いされたその翌日より病魔のおかす所となり永年流罪中のご疲労から老衰これに加わり、二十五日には終に大往生をとげられるのである。

法然上人八十年のご生涯の中、この最後の二カ月間が特に大切な意義ある時であったと思う。もしも流罪中にご他界される様なことがあれば、念仏門もこれまでに大きく発展しなかったであろうし、「一枚起請文」をお残しする事も出来なかったであろう。いわんや今日の総本山知恩院もあったとは思われない。

生涯を幾多の苦難の中に過ごされた、上人の最後のお正月が弟子達信者の方々に取りまかれておだやかな楽しい一日であったことは、そのみ教えの流れを汲む私達には何よりも心嬉しいことである。

昭和五十二年の元旦もまた夜廟に参じて種々の事を思い浮べながら、念仏申すことの出来た身の幸せを思う。

■ 初詣での雑踏の中で ■

福 田 亮 成

(大正大学講師)

喧騒^{けんそう}の大都会東京の町がシーンと静寂になるのは正月の三カ日と、八月のお盆ぐらいでしょう。八月のお盆の時には、東京の人間はお互いに「暑いですね」と同時に「まるで正月みたいですな」と言って、その静けさを挨拶の言葉といたします。正月とお盆は、ちょうど一年を二分して往きと帰りであったり、明と暗であったり、種蒔きと収穫であったり、労働と休息であったりするので、そういう節^{ふし}に位置しております。仏教では「日日是好日」と言って一年という区切りも、正月とお盆という区切りも本来意味のないことといたしますが、特にお盆の行事などは日本民族固有の祖霊観を巧みに意味づけ、仏教の一大行事にまで発展させたことは、仏教の日本的

展開のもっとも重要な具体例ということができましよう。このように一年の節目に重要な行事を配し、それへの参加をうながしていることは、仏教を担^{たな}ってきた多くの人々の強^{とた}かな教化への情熱の結果にほかなりません。さて、東京の町並みが静寂のなかにあり、普段はあれほど自動車をはしっていた道路は、広々とした空地となり、信号灯がゆっくり点滅しています。たまに自動車が走ってきてもまるで音が聞こえません。さて、町並になくなった騒音はどこにとんでしまったのでしょうか。

東京を中心とする関東地方には、正月に多くの人々を

むかえる場所が数カ所あります。特に弘法大師を宗祖とおおく真言宗系の大寺院が多く、例えば千葉の成田山新勝寺、神奈川の川崎大師平間寺、八王子の高尾山薬王院、足立の西新井大師総持寺等があげられます。これらの場所には、町並から消えた騒音がそっくり移動してきたように、多くの初詣での人々の姿を見ることが出来ます。初詣での人々は毎年鰯登りに増えています。まったく「人波」の言葉通りあとからあとからおしよせる人波は、とぎれることがありません。どこの寺院も大規模な伽藍をようし、大扉を一ぱいに開いて人波を吸収しています。そのさまは超大型のエアークンデショナーに似ています。いや現に社会という家の一隅にあってその働きをしているのかもしれませんが。

現代の社会はどんなに鼻真目に見ても外面はともかく、その実体は幸福ではないようです。そこには多くの不満が沈澱しているはずです。人間の本質的な苦はむろんのこと、生活の場での苦悩は多様をきわめ、重く瘡となつて社会の壁にくいこみ、人の心に不安をかもしています。多忙な日常生活の中では充分それを感じてはいいても、深く考えることによって現われてくるでしょう

ない恐れをさけています。しかし、何もできない一日、そしてそれが一年間の区切りということから、多忙さにまぎれていた苦悩と対峙することになります。

大伽藍を遠くに見、やがて大扉の中に吸い込まれてゆく大群衆の一人一人はいつたい何を祈っているのでしょうか。私も大群衆の一人となつて共に歩をはこぶその時、宗教がもつ巨大なエネルギーを垣間見る思いがいたします。そこには大群衆の発散するエネルギーと、そのエネルギーを吸収しておのれのエネルギーとする宗教がもつもう一つのエネルギーとの衝突があります。このような時に、私はいつも弘法大師の次のような言葉を思いだします。

「加持とは、如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影衆生の心水に現するを加といひ、行者の心水よく仏日を感じるを持と名づく」

この文章は、弘法大師の名著である『即身成仏義』の中にあるもので、仏と我々との交渉という普遍的な事柄に關しての名言であります。エネルギーの摩訶不思議

議^ぎさを「加持」という言葉で表わした大師も、それに気づいていたということが出来ます。卵がわれて小鳥が出てくる様子を見たことがあります。卵の中の小鳥の生長の力だけで殻が破られるとは思われません。そこには外から自然の力が加わり、卵の中の生命力がそれにこたえた瞬間に一挙に一つの生命が誕生する不思議に思わず感嘆の声をもらしてしまいました。悟りとか成仏とが往生といわれる事柄は、私達の持つ命の再誕生ということではなからうか、と考えております。

真言宗における正月行事は、修正会^{しゆしやうえ}、初大師^{はつだいし}とかが一般に知られています。修正会^{しゆしやうえ}は本来正月元旦から一七箇日の間修行せられる法会で、国家安全並びに仏法興隆が祈願されています。普通の寺院での元旦の早朝に修せられるお勤めの次第は、祈願を目的とするので、

先九条錫杖

次観音経

次般若心経

次諸真言

となっております。先祖供養のための法要次第とはその構成が異なるものです。又、初大師とは、月並御影供^{つきなみみかげく}を一年の中で初めて修することから、そのようによばれるもので、弘法大師が承和二年（八三〇）三月二十一日に高野山上に入定せられたのをもって、毎月二十一日に大影の御影をおかざりして修する法要であります。大寺院では盛大な法要が厳修せられており、弘法大師を本尊とする川崎大師平間寺などでは、初大師とよび多くの参詣人をおよんでいます。

日本仏教を仏・法・僧と配当した人がいます。即ち、浄土系の宗派では「南無阿弥陀仏」と称え、日蓮系の宗派では「南無妙法蓮華経」と唱え、真言系の宗派では「南無大師遍照金剛」と誦していると。たしかに、その意味ではこの配当も頷^{うなづ}けます。「南無大師遍照金剛」とは、弘法大師のことで、遍照金剛とは大師がみずからなつた呼び名であり、自分の著述に「遍照金剛撰」と署

名しています。たしかに、弘法大師空海の世界はすばらしく雄大であり、遍く照らされていて明るい。弘法大師は、自分の求道の過程を基としてそれに十段階の構成を考へられました。第一異性羶羊心、第二愚童持斎心、第三嬰童無畏心、第四唯蘊無我心、第五拔業因種心、第六他緣大乘心、第七覺心不生心、第八如實一道心、第九極無自性心、第十秘密莊嚴心の十階梯で、最終的には秘密莊嚴心に到り着くわけであります。これは十種類の人間の存在ということではなく、自心の源底をきわめる深まりの次第であり、十段階は全て乗り越えられるもので、乗り越えられることによってその全てが肯定されてくる、そのような十階梯だということができましょう。

雑踏の中を大伽藍の前へ前へとおされて歩いていく私、やがて大扉の中に吸いこまれてゆく私。前述の「十住心」がエアークンデションナーの十に区切られた綱目となつて口をあけています。堂内には御賽銭を投げて何ごとか祈念している人々、やがて大扉から満足げな顔をした人の流れが静かです。そこでの弘法大師は、一宗の祖師をはるかに越えて広大です。各地に存在する弘法大師伝説

の多様さは、大師に仮託した民衆の願望の具象化であり、そこでも一宗の祖師という枠は消滅しています。

仏にとつて誓願が利他行の原動力であるように、我達人間にとつて願いは生活そのものです。といえは言いすぎでしょうか。その願いが単純なかつ即物的な、そして感情的なものであつても否定することはできません。日常的な生活とは、単純であり、即物的であり、そして感情的なものであるからです。

弘法大師は「高野山万燈会の願文」のなかで、「空虚尽き衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きん」と、まことに強烈な願をかがけています。私も燈明のゆれる薄暗い堂内で、仏法興隆を、国家安全を、世界平和を、そしてささやかに家族の健康と平和とを祈念しました。

如来の大慈悲は、常に私達にそそがれています。私達の再誕生（成仏・往生）はもっぱら当方の精進こそ、その契機となるわけであります。まことの祈念こそ「加持の世界」の出現の因となるということでしょう。

正月を一つのアクセントとしてより充実した生活をめざし、がんばろうではありませんか。今年もますますの御多幸を祈念しつつ合掌。



巳歳を占う

いま
えだ
じ
ろう
今枝二郎

(大正大学専任講師)

十二支の動物が後世付会されたもので、元來は方位の区分であつたと、「卯の歳を迎える」の中で述べた。つまり、十二支を示す文字と、そこで呼ばれる動物とは直接関係がない。ところが、巳にかぎって文字そのものが蛇であり、その意味で巳歳は特異な歳であるということができよう。

晋代に葛洪という人が『抱朴子』という書物を著わし、道教の理論的基礎をまとめているが、その「登涉篇」に「巳の日に、寡人と称する者は社中の蛇にして、時君と称する者は亀なり。」とあ

つて、この時代には明らかに巳と蛇との関係が文獻に現れている。

では蛇がなぜ「み」と呼ばれたのであろうか。

語源には二つの説があり、一説は『日本釈名』や『和訓栞』などに見られる「ヘミ」の略で、一説は『言元梯』に見られる「実(ミ)」であるが、ウサギやネズミを略してウ・ネと呼んでいるように、ヘミ省略説が有力のようである。ヘミとヘビはケムとケブルのごとく、同段や同行で転音するのと同様である。

昨年の竜は瑞兆の雄であったが、蛇はよきことにもあしきことにも、古今東西を通じて登場する興味深い動物である。ただし、あしきことといっても、蛇が王女に化けて誘惑する話など、どちらかというとき美しさを秘めているので、凶兆とするにはふさわしからぬ動物である。

中国の古典の中でも古い時代に属する『詩経』に、「これ虺、これ蛇は、女子の祥」と見え、ほぼ同時代の『易経』にも、「竜蛇の蟄はもって身を存するなり」と、いずれもかなり古くから蛇をめぐっての信仰・伝説が世に行われていたことを思わせる。それは文献のみならず、青銅器の文様に蛇の文様が極めて多いのも、このことを裏づけている。

『詩経』の場合は祥とすばり表現しているのであるから、吉兆・瑞兆の動物と考えられていたことはまちがいない。『周礼』に「亀は智として、蛇は果なり」とあるのも、蛇がよき動物として記されている例である。

よき動物という点から蛇について記されている

古典を拾ってみると、薬草と結びついているのもその類にあげられる。

薬草はある場合には不死の薬であり、ある場合には不老長寿の薬になっているが、このほか傷口の治療に用いられることもある。蛇銜草^{だがきくさ}というのは第三に属する。草の名の由来は、傷ついた蛇がこの草によって傷口をなおせたところからきており、その様子を見た農民がその薬効で自分の傷をなおせた伝説がある。この伝説は、蛇の超能力を表したものだといえるが、やはり蛇をよき動物としてとらえている伝説である。

傷ついた蛇から想起されるのは、隋代に取材した伝説である。その伝説に登場する傷ついた蛇は、報恩譚としての蛇であるから、吉兆として蛇を眺めても当然のことと言える。

蛇は巳の字のごとく、屈伸自在の動物で、形のうえでも古典では決して悪ものになっていない。『孫子』にいう「常山の蛇」は、陣形を示したものであるが、体のいずれを攻められても、自由自在にこれに応じられるという陣形。戦場で自在で

あるという発想は、ただ単に形を述べただけでなく、已の内面的よさもまた計算されていたものに近い。

蛇に関するあれこれを見てみると、上述のようになかなか見直すべき価値を備えている動物なのである。

蛇が財宝と深い関係にあることは、禍と解する『沙石集』のような見方もあるから、一概に吉と言えないかも知れないが、『南史』には梁の武帝が元洲苑に幸した時の話として、財宝と結びついた逸話が載っている。我が国の古典に見られる伝説は、多く中国の典籍に典拠があるので、ここに一々あげないが財宝とかかわりのある話しや、かなり多くの種類にのぼる蛇のそれぞれに、たとえば、銀蛇・金蛇・青蛇などの名と、それが現れたときにどのようなことが起ったかなど、『徒然草』・『和漢三才図会』などに見出すことができる。しかし、それはどちらかと言えばよろしくない方の類に属するものが多い。『徒然草』二百四段には「蛇をば大井川にながしてけり。更にたたりな

かりけり」と見えるが、これはわが国人の蛇に対する一つの心的傾向を示していると思われることができ、どちらかというと、蛇は歓迎されていないのである。

実は中国にもこうした歓迎しがたい蛇伝説も存在するのであって、『山海経』という書物には、「涇山に大蛇有り。赤首自身、其の音中のごとし。現われるれば則ち其の邑大いに旱す。」と旱天の元凶のごとく述べられているし、『莊子』に見える蛇にも、余りほめられないのがある。

しかし禍を転じて福となせる要素をもった伝説の多いことは、蛇に迫いまわされるのを嫌悪しているような者に確かに光明を与えるに違いない。

楚の孫叔敖が子供の頃、遊びに行くと両頭の蛇に出あう。伝説によれば両頭の蛇を見たものは必ず死ぬことになっている。孫叔敖はすっかり気落ちし、家に帰ったが、母親は我が子の表情のさえないのを見てわけをたずねると、両頭蛇を見たという。そこで母親がその蛇をどうしたかというところ、この蛇の危害が他の人に及ばぬように殺してしま

つたと答える。母親はそれを聞くと、陰ながら徳をもった者は、天が必ずこれに福をもって報いるものであるという。果たして孫叔敖は命をおとすことなく、後に大成して楚の宰相になったのである。

この話は、まさしく禍を転じて福となした逸話であり、凶と思われたものが、むしろ吉の因になつてゐる。さきにあげた竜蛇の蜃の話しも、冬籠もりという過程を経ての成功であつて、そういう意味では、吉を得るのには、それなりの過程のあることを表しているものと思う。

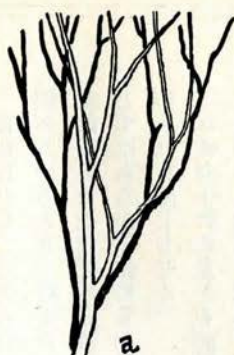
吉を吉とし、凶を吉とする。蛇について古典を調べているとき、蛇をめぐる得た感懐である。勿論このことはどのような場合にも当然必要なことではあるが、蛇のもつ執念が一層ひしひしとそのことを感じさせる。

『韓非子』に見える涸沢の蛇の話は、処世と結びついた典型的話で、前のことと直接関連はないが、人間が歩む道標として描き出されている点で興味深い。

蛇だか・蛇虺・うわばみ、どの語をとつても形容

語としては好ましくない。だが不思議と眼前の不利が、将来に明かるく開花するのが見られるのは、あのくねくねした姿態から自ずと生じた人間の感覚であらうが、巳の字もそのような姿態の象形であり、へびのもつ特性がなんと無数の事物に現れていることであらう。

昨年の竜でたくましく上昇した自己の命運を巳歳は粘り強く自己のものとしておく歳であらうか。はたまた、禍がしのび寄ろうともみごとに福に転ずる歳であらうか。蛇のなんともえたいの知れぬ姿が、今年はあらためて瑞兆として、竜の兄弟として我が心に、我が眼に浮かんでくる。『神異経』『博物志』『迷異記』『楚辭』そして『古事記』、その他数多の典籍に登場する蛇は、巳歳に因んでもう一度じっくり信仰や伝説の素材として、取り組んでみたい、親しみのある動物である。長い蛇にあやかつて、いささか冗長の感を免れない文となつたが「蛇足」は思うにこの稿のいたるところにありながら、本体を失した非才を恥づるばかりである。



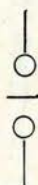
目をあげて女人を見ず

竹^{たけ}中^{なか}信^{しん}常^{じょう}

(大正大学教授・文博)

浄土教の流れ

△十三▽



火の河と水の河。そしてその間の一本のほそい道。此岸のおそろしさを脱れ、一大決心のもとにこのほそい道を渡ってゆく旅人の姿。それは誰でもない。この「二河白道」のたとえをお説きになった、善導大師その人の姿なのである。

浄土宗の碩学で、中国仏教研究の權威、昨秋その学蹟のゆえに学士院会員に推挙された塚本善隆博士は、善導大師が念仏の教えを弘め、一般民衆のために活躍された中国の長安（現在の西安）を何回か訪ねられ、千三百年の昔、善導大師が実際に立たれた、実際に眺められた終南山の台地（神禾原）に立たれたとき、大師の説かれた「二河白道」が眼前に横たわっているのを感じたと述懐しておら

れる〔善導教学と大衆の接点〕、浄土宗第七区教化センター刊

終南山というのは長安の都から少しはなれたところにある、その端が台地になっており、ここに立つと、はるか西方には当時中国一の文化都市として殷賑（いんしん）を極めた長安の都を望むことができる。そしてその手前には渭水（いすい）という河が南から北に流れている。長安の華かな都を西方極楽の理想の国とみるならば、そこへ至る一本の道がまっすぐ西に走っている。たとえ中の「白道」そっくりである。しかもその道は渭水の流れを渡って長安につづいてるのである。それゆえに、この道をはさんで渭水の南と北を「火と水」とにたとえるならば、そこには自然に「二河白道」の図ができあがるのである。塚本博士はこの風景を御覧になって、はじめて「二河白道」のたとえの意味を感得されそこに物語られる旅人は、ほかならず善導大師御自身であることを実感したといっておられるのである。

それでは、善導大師は御自分をたとえの中に組み込んで、一体、何をわたしたちに訴えようとされたのであろうか。このことについて、現地に立って善導大師の感懷をマザマザと肌で感じられた塚本博士は、大要、次のよ

うに推量されている。

— 〇二〇 —

善導大師は非常にみづからを誠めることにきびしかった方で、仏教で定められた戒律を厳格に守られた方であった。「目を挙げて女人を見ず」といわれるくらいに、自分の心を乱すおそれのある女の人へ視線をむけなかったといわれる。しかし「女を見なかった」ということは、逆に、女は美しいものであり、男の心を魅惑する愛欲の原因になるものだといいことを、痛いほどに知っておられたということにほかならない。「目を挙げて女を見ない」ということは、いいかえれば、それだけ心の中には愛欲の炎が燃えさかっているからで、ただそれがおもてに出てこないだけで、何とか押えつけているが、やはり人間としての愛欲を断ち切っていないことにもなるのである。

そのような思いの善導大師が、終南山の台上から遙か西の長安という理想の国に通ずる一本の道をみる。心の中には愛欲の炎が燃えさかっている。貪欲の水が足下を

洗う。そういう中に、自分は人生という非常に苦しい旅を続けなくてはならない。

「人生というものは、愛欲の煩惱を断ち切れない
「私」が二尊（釈迦・弥陀）の教えに「今」乗じて……
人生の道を正確に歩き通して行くのだ。そこに人生の
信仰生活があり、それは立派に永遠の生命に通じるの
だ」（前掲書一〇四頁）

塚本博士は御自分が善導大師の身になって、終南山の
風光の中に立たれたのであるが、これはひとり塚本博士
に限らず、わたしたち一人ひとりが二河白道の構図を眼
前にして、わたしたち自身が白道を渡る「旅人」になっ
た思いを固めなければならないのである。こうした自覚
に立つとき、はじめて、善導大師が何を描こうとしたの
かが、はっきりとわかってくるのである。

それはあらゆる危難と誘惑をはねのけて、白い細い道
に足を踏み出した旅人の「決心」の固さである。この
「信」は理想の国つまり極楽に生れる「すくい」に通ず
るものである。

仏のすずめと導きの声を信じ、それまでは世俗の塵に
埋もれて心づかなかった、自分の心の中にひそかに宿っ
ている理想追求の心つまり「願生心」をふるいおこし
て、人生をのり切ってゆくのである。このように「信」
はなにも焼けず、水にも溺れぬ堅固不拔の勇気をふるい
おこさせる力を持っているのである。

— 〇三〇 —

「信仰の力」の偉大なことは、信を何よりも大切なも
のとする浄土教をはじめ、多くの宗教にみられるところ
であるが、特に、浄土教によく似た性格を持つキリスト
教でよくいわれるところである。キリスト教が今日みら
れるような世界宗教にまで発展した、その基を築いたと
いわれる聖パウロは「神の恵みにより信仰によってのみ
義とせられる」といっている。これまでのキリスト教
は、神によって選ばれた民つまりイスラエルの民だけの
宗教とされていた。ところがパウロは、「神を信じ、神
によって義とされたもの」——つまり神の御心に兼った
ものは、イスラエルの民に限らずいかなる人間でも神は

救つて下さるのだという教えを説いた。これによつて、キリスト教はローマをはじめ、地中海沿岸諸国に急速にひろまつた。いつてみれば、浄土教でいう「光明遍照、十方世界、念仏衆生、攝取不捨」と同じく、念仏を唱えるもの（神を信ずるもの）は、十方世界（世界中の人間）を救いとして、一人をあますことはないというのといささかもちがいのない信仰の状況である。

当時、イスラエルは、ローマ帝国の支配のもとにあり、その庄政に苦しまされ、キリスト教徒を当初はライオンの餌食にされるなど、ひどい迫害をうけ、パウロ自身もこの迫害のために殉教（信仰のためにいのちを投げ出した）したのであるが、神を信ずるキリスト教徒の火のよくな信仰がやがてローマの皇帝に認められ、ローマの国教とされるようになった。これもひとえに信仰の力の偉大さを示すことといえよう。法然上人が流罪に処せられたとき、弟子たちが罪の少しでも軽くなるように、「念仏をひろめることを控えたらいかか」とすすめたのに答えて、

「たとえ死罪にあうとも、このこと（念仏すること）い

わざるべからず」

といわれたのと相い通ずるものが感じられる。

「信仰」を出発点として大いに発展したキリスト教もローマの国教として公認され、ローマ教会を神の国の地上に実現したものであると考えられるようになると、教会の権力がすこぶる増大した。キリスト教の教えによると、「教会」というものは単に建物とか場所とかをあらわすだけのものではなく、それはキリストの「体」をあらわすものと信じられ、したがって教会の中で説かれる「教え」は神の言葉であり、これを説く司祭は神の「代理人」と考えられた。神の代理者である司祭は当然一般人の人々以上のものであり、司祭の最高位にあるローマ法王は絶大な権力を持つようになった。そして、たとえばインノセント三世という法王は次のような宣言をした。

「造物主は教会の世界に二つの崇むべきものを置き給えり。一は最もすぐれたものにして、その心靈にありては白昼の太陽の如く、他は稍々劣れるものにして、その肉体にありては暗夜の月の如し。かくて法王が皇

帝の上位にあるは、すなわち太陽の月におけるに等し。天地間及び幽冥界の万有が神の前に跪くが如く、万人は神の教師たる法王に服従すること、蓋し羊が牧童の杖に導かるるが如くなるべし」

法王は太陽であり、皇帝は月である。太陽は皇帝よりも明るく偉大である。したがって法王は皇帝よりも偉大であり、すべての人民は法王に服従しなければならぬ。法王は地上の最高者であり、絶対者である。皇帝といえども法王の命令に従わなければならないとされた。

わが国の平安朝の末に、後鳥羽上皇がいわれたという。

「意のままにならぬものは、賽の目と鴨の流れと山法師」

という言葉が思い起こされる。当時比叡山にたむろする

三千の山法師、また奈良の興福寺を本拠とする荒法師たちは、氣に入らぬことがあると刀剣で武装し、大挙して宮中に押しかけて強訴した。これに対しては政府も宮中も、手も足も出せず彼らの思いのままにするより仕方なかったと伝えられる。

神の代理者である法王、仏のお使いである僧侶、これらが信仰の名を仮りて地上の権力を得ると、とんでもないことになるのは、洋の東西を問わず同じであることがわかる。

こうなると、信仰心などどこかへ消し飛んでしまつて、おのれの力を増し、名利榮達の道を血まなこで探すようになる。そのためには他人をかきのけ、蹴おとして、自分だけが這いのぼろうと血みどろになつて争い合う。そうなると、世間一般の人々の争いよりかえって宗教者の争いは、なまじいに神だの仏だのを背後に持っているだけに厄介であり、根深く、陰湿にならざるを得なかったのである。



法数術語補遺（一）

たから
宝田正道

・宝池観・宝楼閣観・華座観・像想観・阿弥陀仏観（真身観）
・観音観・勢至観・普往生観・雜想観の十三を指す。

一から十二までを付した法数術語の解説は、前年度で一応すませたので、今月号から、十三以降のものについて引き続き紹介したい。ただし、このたびは、月数に合わせるわけにいかないので、数の順序にはよるが、必ずしもまとめて一定数を取上げない。またこれまでと若干趣を変えて、単なる解説だけに終らず、項目によっては関連のある類語や史話などを取入れて、肩のこらない読物風なものにしたい、と考えている。したがって、特定の項目はある程度長くなると思うがご了承いただきたい。

十三観 じゅうさん がん

心を統一して行う（定善）浄土の観法を十三の順序としたもの。すなわち、日想観・水想観・地想観・宝樹観

法然上人は、その著『選択集』にこの十三観を説き、「たとい余行なしといえども、或は一、或は多、その堪ふる所に随つて十三観を修して往生を得べし」といわれているから、この十三のうち、どれか一つでも修行すればよい、ということになる。上人は自身、三昧発得してこの浄土観を成就されたが、古来、一般的に多く試みられたのは、このうち初観の日想観であろう。

日想観は、文字どおり日（太陽）を想い拝観すること、特に日没の状を觀察することをいう。「まさに想念を起して正坐西向し、諦らかに日を観じて心を堅住なら

しめ想いを専らにして移らざれ、日の没せんと欲して、
狀かたち鼓を懸けたるが如くなるを見るべし」というのが、そ
れである。これを説いた『観無量寿經』によると、十三
観は定善であるから、思いをひそめ、散り乱れる心をこ
ろし、禪定に入つて觀想しなければならぬが、日想觀
の徳は、西に没する太陽をみるのであるから、そこに西
方淨土の所在を知り、また日を覆う黒雲などをわが心に
曇る罪惡と気づき、さらに光明赫々たるありさまに阿彌
陀仏の超日月光を想起するといふ点にあるといふことが
できるのである。

大阪の四天王寺は、当時大阪灣に面する絶好の場所に
あり、日想觀を修するに洵え向きの地を占めていた。こ
とにその西門は、「極樂淨土の東門は、浪速の海にぞ迎
えたる。轉法輪所の西門に、念仏する人まいれとて」
(梁塵秘抄)と、当時の今様歌にも歌われているように、
平安末期からは、念仏信仰と結びつきが一層深まって、
かの鳥居の額にも「釈迦如来轉法輪所當極樂土東門中心」
と書かれていた、という。法然上人もここ荒陵の新別所
(二心寺)で、日想觀を修せられた、と伝えられ、また、
謡曲『弱法師よわはし』には、盲目の子と再会した父親が、喜び

のあまり、ともにここで日想觀を修する光景が美しく描
かれている。

十六じゅうろく観かん

『観無量寿經』には、前記「十三観」に加えて、上輩
觀・中輩觀・下輩觀の三を説き合せて十六観とする。一
般には、これら十六すべてを心統一による觀法とみなす
が、善導や法然によると、前三者は觀法(定善)であ
るが、後三者は積尊自開の説法で、いずれも心を統一せ
ず、散乱した心のままで惡をやめ善を修する(魔惡修善)
散善である、と解釈されている。すなわち、上輩觀は、
大乘を学ぶ凡夫(三福のうち主として行福を修める)で、上
中下の三品に分けられる。中輩觀は、大乘を学ぶ凡夫と
仏教以外の善を修める凡夫の總称で、これも同じく三品
に分れ、上中二品は小乗の凡夫(戒福)、下品は仏教以外
の善を修める凡夫(世福)とされている。下輩觀は三福
を修せず、ただ惡を修めるだけの凡夫で、十惡や破戒な
いし五逆にいたる種々の惡をなす人々であるが、それで
も命終の一時に唱える称名念仏によって救われる、とす
るのである。

十八願じゅうはちがん

第十八願、すなわち『無量寿経』に説く阿弥陀仏四十八願の中で、最も重要な「王本願」とされる本願のこと、未来の世にも仏となることをえんに、十方の衆生が心から信じ願ってわが国土に生れんと欲し、ないし十声の念仏を唱えるにもかかわらず往生しなかったならば、われ（法蔵菩薩）は仏とならない（不取正覺）、と誓ったことをいう。この「十八」という法数になぞらえて、浄土宗では著書の巻数や建立寺院の数などに用いることが流行したくらいであるが、中でも有名なのは「十八檀林」のいわれである。

十八檀林は、江戸時代の初期、知恩院の満誉尊照と並んで浄土宗の発展に寄与した増上寺の源誉存応（普光観智国師）が、徳川家康を説いて制定した、関東十八カ寺の学問所をさすが、俗伝によれば、その説得のしかたがおもしろい。徳川氏は松平家の出自であるから、まずめでたい松の字を分解して「十八公」とし、十八という数は阿弥陀仏四十八願の中でも重要な十八願に当る、だか

ら、徳川氏と師檀の関係を結び増上寺を菩提所とするからには関東に十八の檀林をつくって大いに宗学研修の道場とするがよろしい、と勧めたというのである。

二十五菩薩にじゅうごぼさつ

平生あるいは臨終の際に、阿弥陀仏に随伴して、行者の擁護あるいは来迎のために集団でやってくる聖衆の群れ。必ずしも二十五体に限らず、多少の過不足があるが各自独特の楽器や持ち物をもつものとされている。もと『十往生阿弥陀仏国経』（偽経といわれる）などに説かれ、源信はその著『往生要集』にこれを引用しているが、行者の平生を守護する聖衆としての二十五菩薩と考えていたようである。すなわち、『栄華物語』にも描写されているように、平安時代には、二十五菩薩の信仰も、聖衆来迎の思想も並立してあったようであるが、特に行者の臨終に二十五という数を限った菩薩衆が来迎するといいう、いわゆる「二十五菩薩来迎信仰」は、成立していなかったと思われる。それが、『増鏡』（巻五）などに記されているように、鎌倉時代中期以後になつて、初めて二十五菩薩を来迎の聖衆として取扱うに至ったものと想像

される。

いずれにせよ、この二十五菩薩の名は、観音、大勢至・薬王・薬上・普賢・法自在・獅子吼・陀羅尼・虚空蔵・徳蔵・宝蔵・金蔵・金剛・山海慧・光明王・華嚴王・衆宝王・月光王・日照王・三昧王・自在王・大自在王・白象王・大威徳王・無辺身の諸菩薩で、各自に独得の儀相が与えられている。たとえば、観音は蓮台を、勢至は合掌を、薬王は幢幡を、というふうに、それぞれ仕草や持ち物が説かれている。もっとも、それらは各種の二十五菩薩来迎図像や『二十五菩薩和讃』などによれば必ずしも一定でなく、いろいろに入りまじっている部分もあることは免れない。

二十五菩薩来迎思想の抬頭とともに、「迎講」という儀式が創案され、二十五菩薩の面を彫刻したり、講会の行道（練供養）にそれを用いたりして、現在、当麻寺・誕生寺・藤之寺などで行われる来迎会の原型ができたものらしく、和讃の普及とともに、一般に二十五菩薩という数の印象も次第に定着するようになったようである。

三十二相

三十二大人相ともいい、仏の身体に備わる、偉大な人間特有の相を三十二に分けて説く。八十種好（↓）と並んで、仏像を彫ったり描いたりする場合にも、重要なポイントをなす特色である。たとえば、頭の頂上にまげを結ったような一種の肉の盛上り（肉髻）があるとか（頂成肉髻相）、身体の毛が一つ一つ右旋しているとか（身毛右旋相）が、それである。

三十三所観音

観音像を安置する三十三カ所の寺院やお堂のこと。『法華経』（普門品）には、観世音菩薩が、衆生済度のために三十三身の姿（楊柳・竜頭・持経など）などとなって現われたと説かれているのに基づいて平安末期頃から、この三十三体を三十三の堂寺に一体ずつ安置して、順次それを巡拝して歩く、いわゆる「観音三十三カ所巡礼」という風習が生じた。今でも有名なのは、西国・坂東・秩父などの区域に限った三十三カ所の札所で、これらをめぐる白衣の行者の巡礼姿は、一種の風物詩となっている。

どうぞ『浄土』誌購読希望者をご紹介下さいませ。

念佛ひじり三國志

(三)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



四天王寺僧房の朝である。

昨夜来の雨はやんだが風は相変らず吹きつのつてい
る。

雲が翔ぶ。青空のしたを、千切って投げつけられるよ
うに、翔ぶ。

ここでは朝食の給付はなかった。

ひじり（私僧）たちは西門外の巷へ托鉢に出かけてゆ

く。

難民相手の食物屋は、昨日の残り滓を献上する。すえ
た粥や野菜の食べ残しを、差し出す椀へ盛りつける。

信阿弥陀仏は馬粥主従をつれて僧房を出た。住み馴れ
た彼には何軒かの晶気筋がある。

「お上人さま、お早うございます」

どこの店でも主人や妻女が丁重に迎えてくれた。三人
の椀へたっぷり盛りつけてくれるばかりか、新しい椀ま
で持ち出してきて余分な糧を与えてくれた。

「今朝はこれを布施させて頂きますよ」

妻女は微笑んだ。

「いつも有難う」

札を言つて、短い経を読んだ。

食物屋たちは信阿弥陀仏の徳を慕っているに違いない。

妻女の店を離れようとして、捨丸は足首を掴まれた。

瘦せこけた手からみついていた。路傍に老人がうづくまっていたのだ。顔に醜くい吹き出物があった。かたわらには七、八才の幼児が眠っていた。祖父と孫なのであるうか。

「昨日は一食も口にしておりませぬ。お慈悲を」

捨丸は間近にいる食物屋の妻女を見た。いま自分らにくれたすえた粥を恵ぐんでやればいい、と思った。

「くれてあげなさい、そのための布施なのだから」

信阿弥陀仏が促した。

両手を抱え持った碗の一つを差し出そうとしたら、半分で良い、と信阿弥陀仏は言つた。老人も心得ていて、おのれの碗を取り出した。

常連なのである。毎朝、托鉢してきた僧たちに物乞い

前号のあらすじ

今は亡き三位中将重衡の遺児・捨丸と、この少年からかた時も離れず護衛にあたる武士・馬粥。彼らが身を寄せた長楽寺にも、また彼らの内部にも不隠な影が漂い始めていた。長楽寺はあまりにも危険であつた。隆寛のすすめに従つて、捨丸、馬粥は摂津四天王寺に信阿弥陀仏をたずねた。危険な洛中から逃れるともに、後白河法皇の密使・藤原範家が示した平家復興案の鍵をにぎる瓦島の庄四郎に会うためでもあつた。その策とは、船をもとめて西国に逃れようとする義経を、義経の軍船調達の任にあたっている斎藤友実の部下である庄四郎が主を殺して、馬粥とともに待ちうけ、その首級をあげるというものであつた。少年時代に捨丸と同様の境遇にあつた法然上人のもとで念仏者となれば、という生仏の迷惑をよそに、捨丸は悪因縁にひかれて行く。嵐になったこの夜、武蔵坊弁慶と義経は四天王寺西門にやって来た。

をしているようだ。

この老人だけではない。僧房へ帰る道すがら、捨丸たちは托鉢のあらかたを物乞に与えねばならなかつた。一腕の半分だけが残つた。

「じかに恵んでやればいいものを」

少年の捨丸には、この道理が理解し兼ねた。

「彼らは、あきんど（商人）だ」

と、信阿弥陀仏は説明する。

商人である以上は商品を無料で他人にくれてはやらぬ。恵んだりはいらない。しかし僧の手をとおせば話は異なる、と言った。それが「布施」という仏法の流通経路なのである。

ただ物品のやり取りではない。そこに信仰する人間の暖かい愛情がこもる。

布施行をするのは信阿弥陀仏だけではなかった。朝の僧房から出ていったひじりたちもみな同じ行動をしている。

この乱世でゆき場を見失った難民たちは、巷に散らばるこうしたひじりたちによって、わずかに生きのびた。少年捨丸がどこまで理解し得たかは分明でない。しかし馬粥にはわかった。同時に、長楽寺を去って、四天王寺西門のひじりとなった信阿弥陀仏の「発意」もはっきりと理解できた思いであった。

僧房に戻った馬粥たちは残った半碗の粥をすすった。片隅にうずくまって一夜を明かした狩衣をかぶった四人づれが僧房を出てゆくとする。

先頭に立つ僧形の大男は黙過したが、あとの小男と女人らしい影が馬粥の眼を突き刺した。

小男は狩衣の下で明らかに武装している。

「ひじりではないな」

馬粥は呼び止めた。

「あの嵐だ。一夜の宿を得ただけだ」

先頭の僧が大声でこたえた。

「九郎判官ではないのか」

「九郎……」

捨丸がはじかれたように立ち上がっていた。

「だとしたら、何だ」

僧形の大男、武蔵坊弁慶が大目玉にぶ気味な微笑みを浮かべた。好戦的な眼光であった。

「ただ、たしかめてみたただけだ」

馬粥は捨丸の袖をおさえながら言った。武器がない。背負ってきたツヅラのなかだ。そのツヅラも離れた場所にあった。

「無用な詮議立てをするな」

弁慶は警戒の眼を解かずに出口の方へ去ってゆく。九郎義経は終始顔をあげなかった。

彼らが僧房から姿をかき消したあと、少年捨丸は地団太踏まんばかりに口惜しがった。せっかく追ってきた目

的の相手ではないか、みすみすこのまま……と、ツツラの方へ駆け寄ろうとする。

馬粥は、おさえた捨丸の袖から手を離さなかった。

なぜか。馬粥自身にもわからない。

「布施行」を眼のあたりに見て、気持が一変したのであろうか。

夕景近く、境内の方を歩きまわっていた少年捨丸が血相を変えて僧房へ駆け戻った。

「あの連中が本坊にいた」

と報告した。

「本坊に……すると、この寺は九郎たちをかくまうつもりだろうか」

敵を眼前にしたとき冷えた血が、いま湧き立ってきたのを馬粥はいぶかった。復讐の炎が燃える。

四天王寺本坊の巨大な伽藍が、馬粥の心境を再転させたようである。

落人の九郎義経たちを庇護しようとする四天王寺。そこにいやらしい。「権力」を感じたからであろうか。今朝、僧房のなかで声をかけたときはお互いに裸一貫の落人であり、ひじりであった。それが今、相手は「権力」

の傘のもとへ逃げこもうとしているのだ。

馬粥の全身で戦意が燃えた。

「本坊のどこに？」

「どこかは知らぬが、亀がいっぱいいる井のそばに、あの女人が立っていた」

「女人が……」

捨丸が見かけたのは、九郎義経の妻女静にちがいない。

「夜討ちをかけよう」

決然と馬粥は言った。少年の面上も輝いた。

「策を、立てる」

馬粥は僧房のなかを見まわした。信阿弥陀仏の姿を求めた。

策を立てるには、此処に住みついているあの篤実な念仏ひじりの智慧を借りなければならなかった。少くとも四天王寺内部の建物を知悉しておかねばならない。

しかし信阿弥陀仏は、どこにもいなかった。

一一

捨丸を僧房に残して、馬粥は四天王寺の境内深くまぎ

れこんでいった。

九郎義経の連れの女を見かけたという井のほとりに立つた。なるほど空井戸の底にはおびただしい亀がうごめいていた。

女の姿はいっこうに現れなかったが、馬粥はじきに本坊の建物から出てきた信阿弥陀仏をみとめた。

一人ではなかった。高貴な相の旅姿の僧が一緒であった。

信阿弥陀仏は紹介した。

俊乗房重源だという。

馬粥の胸は熱くなった。主君の三位中将重衡が斬られたあと、その首を北ノ方にさげ渡すについて骨を折ってくれた人だったからである。しかしその礼を口にはしなかった。こちらの身分は、信阿弥陀仏にも明かしてはいないからである。

信阿弥陀仏は、重源を師僧だと告げた。

阿弥陀号を名乗る念仏ひじりは、みな重源の弟子なのである。つまり重源は、自らも南無阿弥陀仏と名乗りつつ、巷にあふれるひじりに同じ号を与え、さまざまな勧進の下部組織を固めていたのである。ひじりたちに「念

仏札」を与え、それを売らせて、勧進の一助にしている。

「九郎判官どのは、未だ本坊におられるそうで」

馬粥は、さり気ない調子で訊いた。

「九郎判官が……いや彼はいない。ただ妾女の静はいる」格別に警戒の眼を光らせてはいなかった。

元来、俊乗房重源の人柄には、やや軽いところがあった。

軽い、と言うよりも各地を飛びまわり、貴賤を選ばずに接しているうちに天衣無縫さが身についてしまったのである。何ごとにも隠くし立てすることがない。

たまたま今日の午後、四天王寺へやってくる途次、九郎義経の一行に路上でゆき遇った。お互い旧知の間柄であった。

義経たちは吉野へ落ちのびる、と言った。

それは得策だが、と重源は一行のうちにいる妾女の静へ視線を注いだ。山歩きに女づれは難儀であらう。然るべき場所へ落着いたあとで招いたらどうか、と忠告した。「わしは九郎に藤尾坂の蔵王堂で待て、とすめた。あそこ僧たちはわしの言うことなら何でも聞く。書状を

与えてやった」

妾女静だけを四天王寺へ連れて戻ったのである。そんな秘事を初対面の馬粥に屈託なくしゃべる重源だった。

天衣無縫な重源には、平氏も源家もない。この間は三位中将重衡の斬罪にさまざまな便宜を供与し、今日は源家の九郎義経のために智慧を絞ってやるのである。

人助けのためなら、相手を選ばない。これが重源の真骨頂であった。

この態度が誤解され、ひところの重源は鎌倉の頼朝からきびしく追究されたことさえあった。逃げまくっていたが、頼朝も彼の性格を知り、さらには大仏勧進の仕事を推進するためにその行方をあらためて探がした。所在不明で、法然に手紙を書いて誤解を解いたから出て来い、申し送った事実が「高野春秋録」に記されている。

「女人を吉野へ運ぶには、馬が必要ですな」

策が、馬粥の脳裏でひらめいた。

「馬か……」

「私が調達しましょう」

「調達できるか」

「すぐにでも」

「しかし、あの女をひとり旅へ出すわけにはまいらない」

「私が必ず送り届けましょう」

「そうしてくれるか」

疑ぐることを知らぬ重源だった。簡単に話に乗ってくる。

明後日までに馬を調達してくることを、馬粥は約した。重源は藤尾坂蔵王堂の堂主に書状を書いておこう、と言った。吉野山中のどこかにかくまっている九部義経を妾女静と引き合わせる手筈であった。

「これから生駒へ帰ろう」

馬粥は僧房へもどると、声はずませて捨丸に言った。

「策は、成ったか」

「うむ。上乘の策ですぞ」

主従は眸を輝かし合った。

明後日と言わず、翌夕馬粥たちは生駒から一頭の栗毛を四天王寺へ引いてきた。吉野までは三日の路程である。夜を日についで急がねばならない。

四天王寺本坊の前で、静はこの馬に乗った。重源は蔵王堂主へあてた書状を、馬粥に渡した。

<吉野行き>



「そこまで見送ろう」

もの静かな声で信阿弥陀仏は言った。

この篤実な念仏ひじりは、馬粥たち主従の行動に何かを察したにちがいない。

少年捨丸が手綱を引いて、前をゆく。信阿弥陀仏は馬粥と肩を並べて歩いた。いっこうに別れようとはしない。少しづつ歩度をゆるめて、栗毛との距離を空けた。

「おぬしたちが、どういう人か、私は知らない」

ぼつりぼつり信阿弥陀仏は言いだした。

「誰であらうと僧になった身だ」

「いかにも」

「僧になった以上は考え方を変えねばならない」

「……」

馬粥は信阿弥陀仏の顔を覗くまいとする。

「俗縁にこだわってはならぬ」

「俗縁……」

「俗にあったときの恩讐を忘れ去らねばならない。わが師の重源どのを見るがいい。おぬしらが僧であるからこそ、一点の疑ぐりもいдаかず、だいじな人を托した」

「……」

痛い胸をついてくる。

「その信頼におぬしらもこたえねばならない。僧の身で、俗縁に立ち戻ることは地獄へ堕ちてゆくことだ。それだけは知っておかねばならない」

「……」

「わかったな。では道中の無事を祈ろう。私はここで別れる」

信阿弥陀仏は足を停め、馬粥を往かせた。背中に重たいものが貼りついたのを、馬粥は感じた。

信阿弥陀仏も馬粥主従を信頼しきっている、と言うのだ。彼を裏切れることは、仏にそむくことを意味する。

いま着々と実現に近づこうとする「策」を、馬粥はどう処理していいのか、わからなくなった。

重い足取りで栗毛に追いついた。

「都を落ちてこのかた……」

と馬上の女が話しかけてくる。

一夜とて安らかに眠った夜がない。吉野へ着けば、初めて身も安らぐであろう、と言葉をつなぐ。

馬粥はいよいよ憂鬱になってきた。

「そうじゃ。吉野へ着けば何もかも安らくなる」

捨丸は少年らしくない詐言を口にしてている。

馬上の静は、すっかりこの少年を信頼したふうだ。軽口なぞを叩いて笑ったりしている。知らぬふりでそれに応ずる捨丸――

馬粥はその都度、悪の重味を肩で感じた。

三

すでに深い吉野山中だ。

樹海をぬけると、突如として台地がひらける。ささやかだが、寺院らしい建物がある。その前を通りすぎると、展望はじきにかき消えて闇の樹海となる。

そんな風景のくり返した。

時折、人影が路傍に立つ。みんな山伏姿だ。

べつに声をかけたり、咎め立てたりはしない。じっと馬粥たちを見守るだけだ。

それがぶ気味である。

長い切り通しの上に出た。

藤尾坂であろう。とすると、坂下の右手、松の枝がぐれに見える伽藍が蔵王堂であろうか。目的地だった。

「様子を見てくる」

と、馬粥は捨丸にささやいた。

眼で告げている。

このだいいな質を守っておれ。彼女さえおさえておけば自分らの身は安全だし、九郎義経の首級をあげる機会もつかめるといふものだ。

そんなことは百も承知だ、と捨丸の眼が答える。静女を乗せた栗毛の手綱を握りしめている。

馬粥は藤尾坂を下っていった。

「どこへゆく？」

坂の途次、黒松のかげから声がかかる。武装した荒法師だ。

東大寺、俊乗房どのの使いだ。九郎判官はどこにいられるか」

「書面でもあるのか」

「持っておる」

「渡せ。届けてやろう」

「じかに手渡ししたい」

荒法師はちよつと思案するふうだったが、

「案内しよう」

と、さし招いた。

坂道から別れて草深い林間の道を進んだ。

「蔵王堂にいたるのではないのか」

「あそこは危険だ。別所にいる。何せ九郎判官どのは追われている身だからのう」

歩きながら荒法師の言葉は俄かに親近感をこめてきた。

「ところで九郎どのの一行は、今どのくらいの人数か」

「さよう、百名は超えたかな」

「百名を超えて……」

馬粥はがっかりした。

四天王寺へ逃げこんだときは静女もふくめて五名だった。やはり各地に散った手勢は、思い思いの道をたどってこの吉野へ集結したらしい。これでもう自分らの手で義経の首級をあげることがむずかしくなった。よほど策を、緻密にしなければならぬ。義経を単身で連れ出すことだ。

草深い道を、いくら進んでも別所らしい建物はいつこにあらわれて来ない。

「もっと先か」

「そうだ。遙かな先だ」

そう言いながら荒法師はふりむいた。嫌な笑みを、浅黒い顔が描いていた。

「遙かな……」

「西方浄土か、地下深い地獄か、とにかくおぬしの行く先は遙か先なのだ」

ざらりと白刃を抜いた。

「謀ったな」

「謀ろうとしたのは、そちだろう。九郎どのの首をねらう痴れ者奴が」

ちゃんと此方の腹を見すかしている。なぜ知っているのだろうか。

そんな詮索よりも先ず応戦だ。荒法師は太刀先を鋭く斬りこんでくる。

三太刀、四太刀と受け止めるうち、馬粥は相手の力量を見ぬいた。勢いだけで、格別の技も持ち合せてはいないようである。適当にあしらっておいて、この場を脱出しようか、と考えてもみた。

だが馬粥は考えをあらためた。太刀を双手で握りしめると、まっしぐらに荒法師目がけて突き進んだ。刀身はそのまま荒法師の腹中へめりこんだ。

「ああっ……よせっ……」

こんな叫びが、荒法師の絶句となった。

方針をあらためたことは幸いした。

荒法師を倒した馬粥が次の行動を考えていると、草の向うで人声がした。

「散宿、散宿」

と呼んでいる。

あの荒法師は散宿坊とでも言うのであろうか。

人声は、馬粥が身をかくした榕樹のすぐ前まできた。

「散宿奴、無事に仕止めたかな」

「なあに相手はただの旅坊主だ。造作はあるまい」

二人づれである。未だ散宿坊の死体を発見していないようである。

馬粥は、吉野山中へはいってから、自分らを監視するように途次にあらわれた山伏や荒法師のことを思いうかべた。最初から自分らの命をねらっていたのだ。それも九郎義経の手先とは思えなかった。目的は美貌なあの女人であろう。

藤尾山の手前へ残してきた捨丸らの身が不安になってきた。

＜捨丸の死＞



荒法師二人をやりすごしてから馬粥は草を掻き分けて坂へ出ようとあせった。なかなか先へ進まなかった。さつき荒法師が案内したコースは、道がないようであつてそれなりに草は踏み馴らされていたのである。けもの道というやつである。

何度か木の根につまづいたりしながら、ようやく馬粥は藤尾坂の中腹へ出た。

その途端だ。馬粥は坂上の変事をさとした。

たて髪をふり乱して栗毛が駆け下ってくるからである。馬上に人影はなかった。

馬粥はこの放れ駒に飛びついた。生駒できたえた手練である。疾駆する栗毛の首っ玉にかじりつく、そのまゝ身をひるがえし馬上の人になっていた。

馬首をめぐらして坂を駆けあがる。この栗毛とともにいた捨丸らはどうだったのであろうか。

まず馬粥が坂上の台地で目撃したものは、地上に散らばる数個の死体だった。いずれも山伏姿である。

数名の武者がいた。静女を囲むようにしている。

「つれの童は？」

馬粥は馬上から静女に声をかけた。

「……」

声を発さず、女は背後を指さした。

大樹の根方に仰向いて倒れる少年の死体があった。

いや、死体であるかどうかは判らぬ。馬粥は駒と近づけ、飛びおりて少年の頬に手をふれた。氷のように冷めなかった。

捨丸さま、なぜこんなところで……声を吞んで、少年の非業の死に当惑した。三位中将重衡の唯一人の遺児が、詰まらぬ場所、きわめて詰まらぬ死に方をしたものである。

「この者は？」

武者の一人が馬粥に歩み寄りながら静女に訊く。四天王寺から此処まで送ってくれた人だ、と答えている。

武者は丁重に謝意を表した。九郎義経の家臣で伊勢能盛だとも名乗った。かんとんに経過を説明した。

能盛らが山中の見まわりをし、此処へさしかかったとき、丁度荒法師どもが静女に襲いかかったところであった。捨丸は単身で懸命に戦ったらしい。しかし四方から攻撃され、あまつさえ少年の身だ。力つきて殺された。いまひと足早かったら、と伊勢能盛は捨丸の死体を哀

れむように眺め直した。

「この人たちは妾の命の恩人、判官どのお目とおりを」

静女は美しい声で言った。

「さあ、どうぞ」

と伊勢能盛もうながす。

だが馬粥は首を振った。懐中から俊乗房重源の書状を差し出て、自分の役割は静女を届けること、それも終わったからには、と馬粥は再び馬上の人となった。

「せめてその童、埋葬だけしてやって下さい」

静女に頼んだ。

「ねんごろに葬ります」

そのやさしい面差しが、いつまでも忘れられない。

それにしても静女は、自らの手で埋葬する少年が平家の公達の遺児であったことを知るであろうか。

吉野山中を脱けてゆく馬粥は、馬上で感慨を深くしている。その場限りの感慨ではない。ずっしりと人生全体へもたれこんでくる深々とした思いであった。

もはや豊田長門でも、馬粥でもない。念仏ひじり空阿弥陀仏となる結縁が、この瞬間太い綱でむすばれたことであろう。

(つづく)

年 新 賀 謹

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇―一 大 正 大 学 電話(〇三)九一八―七三二一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛 教 大 学 電話(〇七五)四九一―二二四一代表	上宮学園長 鵜 飼 隆 玄	鎮西高等学校長 真和中・高等学校長 上 田 祐 規 熊本市九品寺三一―一
埼玉工業大学 松 川 文 豪	東山学園長 藤 原 弘 道	焼津市小川三 光心寺住職 北 山 良 祐	青森市本町一―一―十二 正 覚 寺 楠 美 知 行
蓮勝寺住職 柴 田 敏 夫	だん王法林寺 信ヶ原 良文 京都・三条大橋東詰	光明寺住職 白 幡 憲 佑 横浜市南区庚台(久保山)	西 住 院 戸 川 靈 俊 京都市左京区黒谷町三〇

年 新 賀 謹

保元寺

里見達人

東京都台東区橋場一―四―七

称名寺住職

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八―一四
電話(〇一三八)二二―一五七八

中島真哉

青山梅窓院

東京都港区南青山二―二八―三八

野呂幸進

川崎市川崎区小川町六番地二

教安寺

電話(〇四四)二二―四九四六

〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口徳正

華陽院

堀田良謙

静岡市鷹匠二―二四―一八

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二二―四四
電話(〇二八二)二二―〇八〇二

光運寺

飯田信弘

四日市市中部三―十二

青森県弘前市新寺町一〇八

貞昌寺

赤平昌導

(祖畦)

稲田稔界

〒112 東京都文京区小石川三―十四―六

無量山伝通院

法然上人鑽仰会

二 編集後記 二

○新しい年のはじめ、輝くばかりの陽春に向けて、『浄土』誌の読者諸賢とご一緒にまずは心から喜び祝いたい。本年もまた念仏の同声唱和のうちに、安らかな幸多い日暮しがいたせますように。

初空や一片の雲耀きて

草城

松立てて空ほのぼのと明る門

漱石

○「初日のひかり さしいでて 四方に輝く 今朝の空」と、正月元旦の吉日を

家族ともども暖かくなごやかに過ぎた方も多からう。ある人はふるさとの両親のもとで、ゆくりなく新年の慶賀をいたされたことと思う。だれしもが心に期する新しい年の新しい計画も、おそらくはこうした穏やかなのんびりとした中からすこやかに育まれて行くことだろう。松の内にあっては、どこもかしこも静かに鳴りをひそめている。軒下に子供たちのお正月の遊び声が聞えるのが、なによりもゆかしい。こうしたひと

時をしばし迎えられたこの初春のめでたさを、私は素直に喜び、そして心から感謝したいのである。

○通かに寄せられた年賀状のひとつひとつがなつかしい。お正月の雑煮の味や屠蘇の気分のように、懐旧の想いも新たなものがある。しかしながらこうした情趣の片端から、初日の出の希望の光のもと、私たちの今年にかける精進はすではじまっているのである。

望み高けれど

わが才智通かに及ばざりき

(オールコット『四人の姉妹』より)

とは、今の私の卒直な感慨でもあるが、しかし皆様とともにつねに努力の道を歩んで行きたい。「南無阿弥陀仏」と唱和して、合掌する作法の中には、求めようとする私たちの願いが、現実の日常生活における積極的な働きかけとして成熟することを、たえず喚起してやまない。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十三巻 正月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十一年十二月二十五日印刷

昭和五十二年一月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒〇三 振替東京八一八二一八七番